

西表島農業ボランティア体験記

生物資源開発学科 2年 H.K

・初めに

生物資源開発学科、2年のH.K.です。春休み期間中に2週間ほど、西表島の大浜農園という農家さんの下でお手伝いをさせていただきました。2週間という短い期間でしたが、本州から離れた西表島で体験したことはどれも新鮮で、2か月たった今でも昨日のことのような気がします。そして、今回体験した出来事についてこの場をお借りして書いていこうと思います。気になるタイトルがあったら読んでいただければ幸いです。

・西表島での生活

今回のお手伝いには私以外に同じ学科、学年のIさんとHさんも参加しました。さらに、ウーファーさんという方たちも一緒に農園のお手伝いをしていました。ウーファーさんについては次にお話ししようと思います。

作業のある平日は朝9時に朝礼、16時解散という流れで働いていました。毎日同じ作業をやるのではなく、晴れている日は外で種まき、苗運び、雑草抜き、収穫などをやり、雨の日は室内でお米の選別、パッキング、お茶作りなどやっていました。農家といえば栽培のイメージが強いですが、販売までやるのが仕事です。作業が終わり、解散した後は農園のアイドル犬の、シズクとユキの散歩をしながら浜辺でモズクを採ったり、寝たりするのが日課でした。こんな感じで一日が終わると夜更かしの体力もなくて、自然と早寝早起きの習慣がついたのは良かったです。



・ウーファーさん

大浜農園ではウーファーさんという、簡単に言うと食事や宿泊場所が提供される代わり

に農業のお手伝いをする人がいます。私がいたときはフランス人の男女 2 名とスイス人の女性 1 名がいました。海外でもこうした制度があるので、海外の農業に興味のある方は利用すると滞在費が安く済んで良いかもしれません。英語に自信がなかったので少し不安でしたが、皆さん日本語が上手だったので会話にはほとんど困らず、休日には一緒にカヌーをしたり、ホテルを見に行ったりして仲良くなれました。

フランスの方は各地でウーファーをやりながら旅をしているようで、石垣島で習得した編み技術で、アダンという植物からひもを作って一から草履を作ったりしていました。手先が器用ですよ。以前はスイスのレストランで働いていたようで、私たちが余りもので炒め物を作っている横でおいしそうなゴーヤチャンプルーも作っていました。

スイスの方は日本に住んでいて日本語の勉強中なのだそうです。英語の教師の経験のある人だったので、野菜の種まきや雑草抜きをしながら英語のレッスンをしてもらいました。他にも、スイスの家族のことや文化について話したり、逆に私が日本について話したりもしました。

一緒に生活して相手のことを知っていくと、自分の価値観はまだ狭いんだなと気づかされることがたくさんありました。また、目的は様々ですが、海外の人が離島にまで来て土まみれになりながら農作業している姿を見ていると、まだ自分に出来ることはいっぱいあるなあという気持ちにもなります。

・農大つながり

西表島には天気を観測する施設がないので、近くの石垣島の天気予報を参考にしていたのですが、3月上旬なのに 30 度近くになる日もありました。チョウもそこら中に飛んでいて、すっかり夏でした。南の島といえど、夜になったら寒いのではないかと思念のため防寒着を持ってきていたのですが、結局一週間後にはお土産のパインアップルの緩衝材にして実家に郵送しました。ちなみに、このパインアップルは東京農大の卒業生が栽培しているもので、試食をしながらいろいろとお話を聞かせていただきました。

私個人でたまに自然系のツアーや生物調査に参加すると、農大生や農大関連の方に会うことがあります。今回泊まった宿でも農大生の友達と一緒に昆虫を捕ったりしているという方と出会いました。こういった方と会うたびに、お互いの好きな生き物の話や普段何をしているのかなどお話しするのは楽しいですね。

・イリオモテヤマネコと世界遺産登録

西表島にはこの島固有のイリオモテヤマネコというヤマネコが生息しています。島の方言名では、ヤマピカリヤーやヤママヤーともいうそうです。イリオモテヤマネコは環境省に絶滅危惧種に指定されていて、国の天然記念物でもある貴重な動物です。ですが、保全活動が進む一方で、交通事故や生息地の減少などにより死亡する個体も少なくないようにです。線路がない島での移動手段は車に限られてくるので、野生動物の交通事故はどうして

も起きてしまいます。私がいた2週間でもシロハラクイナやヤシガニ、ヘビの仲間などが轢かれていたの目撃しました。ちなみにヤシガニも絶滅危惧種に指定されている動物です。

ある日、農園のある西側から東側にある港まで、農夫さんの運転で移動したときです。ヤマネコの出現率の高い道路には、侵入防止柵やドライバーにヤマネコ飛び出しの注意を促す標識、減速帯などが設置されているのを見ました。しっかり対策はされているんだなと私は思ったのですが、隣で、「西表島が世界遺産に登録されて、観光客が増加して交通量も増加したら、交通事故は今より増えるよな、海も汚れるだろうし、一般島民や農家は得しない、何のための世界遺産登録なんだろうな。」と言われて衝撃的でした。詳しく話を伺うと、西表島は世界遺産登録の推薦をされていて、島民は登録された時に備えてきれいな島を保ちつつ、より島の魅力を知ってもらえるためにはどうしたらよいか話し合いをして、対策を練ったりしているそうです。

世界遺産登録というと喜ぶものだと思っていたところがあつたので、自分が知らない側面でこういった苦悩があるとは考えられませんでした。世界遺産に認定されることで人が増え、地域の活性になり経済効果が生まれます。ですが、かえって自然や世界遺産を傷つける要因になること、なにより私たちは後世に残るに値する遺産を作り上げた人たちへ、感謝の気持ちを持って訪れるべきだということを忘れずにいたいと思いました。



・農家さんの知恵

大浜農園では農薬を一切使わない有機栽培を行っています。そのため、害虫や雑草の被害を受けやすいのですが、逆に言えば生き物が好んで生活できる環境なので、私たち人間にも安心ともいえます。とはいえ被害を受けて売り物にならないのは困るので、農園では様々な工夫をしていました。大浜農園で主に栽培されている作物は稲です。害虫はカメムシとスクミリンゴガイで、それぞれに合った防除をする必要があります。

まず、カメムシは稲の汁を吸って食事をする昆虫で、この吸った跡が見た目に良くな
く、お米の品質の低下になるそうです。そこで、月桃という植物がカメムシ防除に役立ち

ます。月桃は化粧品やお茶にも使われている植物で、葉っぱを少しちぎると爽やかないい香りがします。人間には好まれる香りなのですが、カメムシにとっては苦手な香りみたいです。この月桃を水田の周りに植えてカメムシが寄らないようにしていました。さらに、農園では月桃の葉と種を使ってお茶にして販売もしています。無農薬のカメムシ防除になって、お茶にもなる。無駄がなくて自然とともに生活する農家さんのこの工夫は、素直にすごいなと思いました。

次にスクミリンゴガイの防除です。別名ジャンボタニシともいわれる通り、4~5センチくらいある大きな巻貝です。この体の大きさだけでもだいぶインパクトはあるのですが、この巻貝が生む卵の色はピンク色です。くすんだ落ち着きのあるピンクではなくて、蛍光ピンクという感じです。これが多数集まって塊を作るので、遠目に見てもとても目立っていました。スクミリンゴガイもまた、稲を食べる巻貝なので食害に悩まされます。細かい話は忘れてしまったのですが、幼く柔らかい稲を主に食べるのと、水深が浅いと活動が抑制される生態を利用して、水田に水を入れる作業と水を抜く作業のタイミングを調節して、数と活動を抑制しているそうです。ですが、スクミリンゴガイは雑草も食べて除草してくれる面もあって、極端に数を減らしてしまうと今度は雑草が生い茂ってしまうそうです。そこら辺の調節が難しいと言っていました。

技術の発展に伴って農薬が誕生して以来、効率の良い生産が実現し栄えてきた歴史がある一方で、土壌汚染や水質汚染などの環境問題が現代では深刻になってきています。その解決の糸口として、大浜農園のような地元の生物をよく知り、利用することで様々な問題に対処していくという姿勢は大切だと思います。

